

氏名	やまさき よりと 山崎 頼人		
学位の種類	博士（文学）		
報告番号	乙第 1831 号		
学位授与の日付	令和 2 年 3 月 16 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当（論文博士）		
学位論文題目	地域社会における日韓交流の考古学的研究		
論文審査委員	（主査） 福岡大学	教授	武末 純一
	（副査） 福岡大学	教授	則松 彰文
	福岡大学	教授	桃崎 祐輔
	九州大学大学院	教授	溝口 孝司

内容の要旨

弥生時代の日韓交流はこれまで、韓半島の無文土器やその影響を受けた土器、または韓半島からもたらされた金属器の日本列島出土例から総体的に描かれてきた。しかし、それらが出土する地域は弥生社会のなかでも極めて限定的であり、その地域から日韓交流を明らかにする姿勢が必要である。近年は韓半島で出土する弥生系遺物の理解も進み双方向の視点から交流を復元しなければならない。

本論文では地域社会、とりわけ三国丘陵地域における弥生集落と日韓交流の具体的検討をもとに、弥生時代における各地域での多様な日韓交流と集団像を示すことを目的とし、日韓交流がもたらした地域社会の変化、日韓交流から交渉への階梯を考察する。課題点を以下のように設定した。

課題点 1：日韓交流を測るものさしである土器の変容の方向性を示す新しい定義を行い、土器からみた日韓交流を復原する。

課題点 2：当時の集団像について粘土帯土器文化期の交流の諸相、変遷を示す。

課題点 3：これまで「北部九州」と「韓半島南部」といった大地域における交流に代表させてきたが、それぞれの小地域における日韓交流の特色をあきらかにする。

「第 1 章 「弥生（系）集落」の成立と展開」では、北部九州における弥生集落や環濠の成立そして多様化を検討し、韓半島からの松菊里文化の流入によって弥生文化が成立し、さらに新しい文化要素として粘土帯土器文化が流入する状況を集落遺構の変遷から示した。

「第 2 章 弥生時代の生業と集団像」では、弥生時代を特徴づける水田稲作がどのように受容され、展開するのかを検討した。各地域で弥生時代前期までは水田や灌漑施設の

規模は大きくない。弥生時代開始期の集団規模は小さく、完成された水田技術を受容しているが、開田規模は集団の規模によって規定されている。また、三国丘陵では弥生時代前期には水田や谷水田、はたけも造られているが、それぞれの規模は小規模である。丘陵地を控えて豊富な森林資源を有する集落は、これまでの狩猟・採集・栽培も続ける網羅的な生業体制であることがうかがえた。集落の拡大に伴う環境変化、森林開発といった視点から植生の変化も検討し、三国丘陵地域における「地域」と「集団」の発展を考えるうえでの前提を整理した。

「第3章 「地域社会」とネットワーク形成」では、弥生時代前期から中期にかけての集団関係や地域社会の形成、その変化や地域社会間の関係について検討した。三国丘陵における環濠掘削、維持・管理の集団関係や日韓交流の下地となる既存の地域間交流、石材の流通網（交通網）を明らかにした。剥片石器石材が縄文時代より継続する地理的な勾配を持つ流通であるのに対し、今山系伐採石斧の流通は三国丘陵に集中的に流通・分配されている。このふたつは異なるレベルの流通システムであり、弥生時代前期後半以降、複雑なネットワークが形成されている。

「第4章 日本列島と韓半島の交流～弥生時代前半期を中心として～」では、無文土器と弥生土器の接触度合いを新たに概念整理し、これまで発掘報告された資料の見直しを提言した。これまでの研究では、日本においては無文土器が交流を通じて弥生土器化する一元的理解が示されてきたが、日韓それぞれの地域で、無文土器・弥生土器が相互に影響を受けていることが資料から指摘できる。在地社会の規制が強くて、その土器の規範を受けるという方向性だけではなく、在地社会も渡来人やその土器を広く受け入れて、相互に影響を与えている。

次に、「環有明海」という枠組みで海上・河川交通を利用した日韓交流の姿を示した。また、日本にもたらされた青銅武器流入以前の青銅工具類についても検討して、日韓の併行関係を考察、日本における青銅器時代の存在を提起した。

「第5章 「地域社会」における日韓交流」では、三国丘陵地域で徹底的に日韓交流の具体像、渡来集団と在来集団の関係を考古学的に追究した。土器の変容から交流をはかるために、まず、当該期の三国丘陵での土器生産を明らかにした。三国丘陵東南部では、5～6箇所確認できる「集落群」を単位としての生産がうかがえ、無文土器が集中して出土する横隈鍋倉遺跡、横隈北田遺跡、三国の鼻遺跡もひとつの「集落群」に相当する。この集落群は宝満川に面した丘陵縁辺部に立地し、河川交通の拠点が日韓交流の窓口である。渡来人は沿岸部だけでなく、河川交通も利用した。

三国丘陵地域では、円形粘土帯土器の出現（前期中頃：板付Ⅱa式新段階）から円形粘土帯土器の出土量増加と多器種化（前期末：板付Ⅱc式期）へと時間を経て無文土器の様相が変化する。そして、資料を再検討した結果、無文土器の影響を受けて変容した弥生土器（変容弥生土器）は集中出土する集落群の隣接集落群（三沢北中尾遺跡・蓬ヶ浦遺跡）で、前期後半段階から出土している。その後、無文土器が集中出土する集落群が衰退し、前期末までに移住した渡来人の子孫も含めて周辺集落に拡散・同化し、在来の土

器生産から使用に至るシステムの中に渡来系集団も組み込まれた。中期初頭から中期前半にかけては、さらに隣接する「集落群」から変容弥生土器が少数確認される。

弥生時代前期を通して無文土器が多く出土するが、その間、変容した無文土器／弥生土器はわずかな発現で、製作技術上の交流は顕著でない。土器生産は複数の「集落群」にわたる大規模かつ集約的なものでなく、「集落群」内や集落内で行われる中・小規模なもので、集中出土エリアでは渡来人と在来人の各集団の土器製作が許容される社会でもあった。周辺地域では変容した土器がわずかながら確認されるものの、弥生土器に一部無文土器の影響がみられるものが多く、弥生土器生産が主体となっているだろう。

集落構造では、在来集団の中に渡来人が入る段階（～前期後半：板付Ⅱb式）から、同じ集落内でも在来集団と渡来集団とが別に居住区を設定している段階（前期末：板付Ⅱc式）がうかがえ、「一時的滞在・往来」から渡来集団の「居住」への変化が想定された。この時期に円形粘土帯土器の出土量増加・多器種化が認められ、渡来人による無文土器生産の可能性を間接的に示す現象と考えた。しかし、生産を直接的に示す無文土器自体の焼成失敗品例は現段階ではわずかな確認数で今後も探索が必要である。三国丘陵全体の集落変遷からは、三国丘陵弥生社会での渡来系集団の偏在性（～前期末：板付Ⅱc式）から集落再編による集団の移動・統合（中期初頭：城ノ越式以降）に起因する渡来系集団の変化（在来集団への同化）がうかがえた。

「第6章 日韓交流モデルと弥生社会の変化」では、三国丘陵でみられた「短期滞在-往来型（偏在・周辺影響型）」（前期中頃～後半）から「居住-往来型（偏在・周辺影響型）」（前期末）、そして「居住-往来型（分散）」（中期初頭～前半）といった交流モデルの変遷を軸に、他の地域でも日韓交流のモデル化を行い類型化した。地域ごとに日韓交流の様相が異なることを示した。

次に、弥生時代前半期から後半期への北部九州弥生社会の変化を環濠集落の動向から考察した。環濠埋没期の前期末～中期初頭の時期は、博多湾沿岸部では、平野の中央部（特に低地の微高地上）に多くみられた早期から前期の集落が衰退し、これらの集落が各平野の周りある丘陵や段丘上に移動したと考えられる。この現象は遠賀川流域の彼岸原丘陵、響灘沿岸の紫川流域の段丘・丘陵上でもよく似た変化が見られる。三国丘陵地域では若干時期が異なり、前期に丘陵への進出が進められ、丘陵立地集落は中期前半までに衰退し、その後、段丘立地へと変化する。こうして成立した段丘や丘陵上の遺跡は安定的に継続するが、中期に入って新たに掘削される環濠はほとんどなく、中期前半は環濠の空白期である。三雲・井原遺跡群、比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群では、それまで段丘の縁辺部に点在していた小集落が段丘の中央部へ進出することによって結合し、大きな集落を形成し始める。中期後半には比恵・那珂遺跡群や大南遺跡、今宿五郎江遺跡で環濠や大溝が掘削される。「環濠の空白期」後の大溝掘削行為は、この時期の拠点集落形成（集住化に伴う）の特徴的な動きである。博多湾沿岸地域において、三雲・井原遺跡群、比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群などが集住の対象になり、区画墓や大型建物など特徴的な遺構を有し、大規模かつ拠点集落となっている。規模は50～100haに

達し、一平野を単位に1～2集落が形成され古墳時代前期まで継続する。

最後に、集落や地域社会の変化と日韓交流の変化を整理した。無文土器では、弥生時代中期前半頃に円形粘土帯土器から三角形粘土帯土器へ変遷し、列島での出土遺跡の分布も大きく変化を見せて、玄界灘沿岸部や山陰の日本海沿岸部に分布が偏る環有明海でも出土様相が大きく変化し、拠点的な集落に収斂される。中期前半の出土が希薄な段階を経て、玄界灘沿岸では中期後半（須玖Ⅱ式）以降に三角形粘土帯土器の出土が顕著になる。弥生時代中期後半以降には、博多湾沿岸を中心に楽浪系土器や三韓系土器を含めた朝鮮半島系土器の出土数が増えるが、これは拠点集落の形成と関係し、新たな交流拠点が整備されていることだろう。この変化に、地域色を見出すことのできた小地域社会の「日韓交流」が北部九州弥生社会、または東アジア世界における「日韓交渉」へと質的に変化する画期を想定した。

弥生時代後半期の「日韓交渉」の復元については東アジア的視野の検討が必要である。今後の課題とした。

審査の結果の要旨

1. 本論文の特色

(1)山崎頼人氏は1994年4月から2000年3月までの6年間、奈良大学文学部文化財学科および大学院文学研究科文化財史料学専攻前期課程で考古学を専修し、2001年10月に福岡県小郡市教育委員会文化財発掘技師に嘱託で採用され、2003年4月には正式職員に採用された。それ以来、小郡市の埋蔵文化財の発掘や報告書作成と保存活用の業務に専心しながら、現在に至る。

本論文は、そうした著者が小郡市域の遺跡・遺構・遺物に真摯に向き合う中で得た研究成果をもとに、弥生時代前半期の地域社会、なかでも三国丘陵地域を正面に据えた社会像を、常に日韓交流を念頭に置きながら分析し描き出した研究成果である。とくに、精密な発掘の実施による新たな分析視角の獲得、それに基づく他地域の既刊報告書の遺構分析、報告書が刊行された遺物の実見による再検討と、報告書未掲載の重要遺物を再点検で掘り起こした点が、なによりの特色である。序章では本研究での課題に、地域社会での日韓交流の特色、土器変容の方向性を示す新たな定義、粘土帯土器文化期の交流の諸相と変遷の3点が明記され、これまで無文土器の変質を表す際に用いられた「擬」ではなく、新に「変容」を用いると宣言された。

(2)具体的作業は、まず第1章では、北部九州の弥生集落や環濠集落の成立と多様化を概観して三国丘陵の住居跡の細かな遷移がたどる。そして、松菊里文化の流入で弥生文化が成立したのちに新しい粘土帯土器文化が流入する状況を、集落遺構の変遷から示

す。第2章では弥生時代の一大特徴である水田の検討だけでなく灌漑施設を詳細に検討し、井堰の杭列から何回かの変遷を読み取る方法を提示した点に特色があり、弥生時代前期までは水田や灌漑施設の規模が大きくないことを示した。また、遺跡の細かな時期を読み取って丘陵地に接する集落が奥部に展開していくとともに森林開発していく様相を、樹種同定や花粉分析、植物珪酸体の分析結果も援用しながら示した。こうした基礎作業を経て、第3章では弥生時代前期～中期の三国丘陵での環濠集落から見た集団関係や地域社会を述べて、日韓交流の下地となる地域間交流を石材の流通網から検討する。ここでは、剥片石器の石材が縄文時代と同様な距離に応じて量が減る自然流通を示すのに対して、今山系伐採石斧は三国丘陵に集中的に流通する様相を示すため、異なる二つのレベルの流通網の存在を明らかにするとともに、第2章で述べた森林開発が、大型木材の伐採と加工であったことを、石庖丁や木材加工石斧の数量変動も加味して実証する。こうしたいわば準備作業の周到さも本論文の特色である。

(3) 第4章と第5章は本論文の核心部分である。日本出土の無文土器が一方的に弥生土器化するというこれまでの枠組みに対して、在来の弥生土器も変容する事例を新たに掘り起こすとともに、朝鮮半島の無文土器も渡来した弥生土器の影響を受けて変容する可能性があることを、実見試料をもとに論証する。さらに、三国丘陵地域での日韓交流の具体像を徹底的に追及する中で、前期では無文土器集中遺跡には変容無文土器や変容弥生土器がほとんどなく、逆に周辺の遺跡で変容無文土器や変容弥生土器がみられ、中期に入ってからそうした変容土器が広がり集中遺跡が解体すること、無文土器人由来の住居はありながらも無文土器を副葬する墓の不在から往来する無文土器人の姿と対外交回路の設定が想定されること、無文土器に残る焼成破裂痕跡から三国丘陵の無文土器集中地区での焼成が想定できることなどを指摘した。また、こうしたモデルを、日本列島各地の無文土器集中出土地域の様相と比較して類型を設定した。第6章では弥生時代前半期から後半期にかけての北部九州弥生社会の変化を環濠集落の動向から検討し、韓国側の動向も踏まえて弥生時代における日韓交流から日韓交渉への階梯をまとめている。

2. 評価

何よりも課題に取り組む方法論を明示するとともに、これまでの擬〇〇土器という用語に異を唱え、日本列島の弥生土器や朝鮮半島の無文土器も、渡来した弥生土器や無文土器が変容するのと同様に、渡来した土器文化の影響で変容することを実際の資料によって示し、変容〇〇土器とするべきであると提唱した点が何よりも評価される。特に、三国丘陵遺跡群の土器を対象に、報告書に収録された土器だけでなく、未公表の資料までもつぶさに点検して新たな関連資料を掘り起こすとともに、焼成痕跡に注目して無文土器の現地での生産を示唆した点と、土器だけでなく竪穴を検討して無文土器人の住居を浮き彫りにした点も評価に値する。さらに、細かな土器編年に基づいて無文土器出土集落の動態を描き出し、円形粘土帯土器は前期末というこれまでの固定観念を覆して前

期中ごろまでその上限を引き上げるとともに、鉄器がない段階である三沢北中尾遺跡出土の青銅斧から、日本青銅器時代の存在を提唱した点も評価される。自身の発掘現場での注意深い観察を踏まえて叙述される環濠や井堰の構造分析も緻密で、著者の独自性を示す。今山系石斧の解釈でも、それまでの先学の方法にそのまま従うのではなく、新たに石庖丁の数量との対比や加工斧の数量との対比を試みるなど、新たな分析方法を模索している。

もちろん、個々の論点の中には異論の余地があり、各課題の分析相互のつながりが弱い部分や、別の資料での検証が必要な部分も少なくない。こうした点はこれからの検討課題であり、本論文がまだ成長中で、今後伸びる余地があることを示す。また、単なる三国丘陵地域のみでの個別実証で終わるのではなく、そこで作成されたモデルと対比して、各地の無文土器出土遺跡の類型化を試みた努力も高く評価される。

本論文は著者のこれまでの地道な研究成果を総括しており、独創性もあって、博士論文として十分な水準にある。

2月1日の公聴会での発表は簡潔明瞭で、様々な質問にも的確に回答していた。